

「あそびの森」活動を通して育つ幼児の音楽表現活動 支援から見た保育の力量形成

子育て支援活動「あそびの森」の検証から

篠田 美里（芸術学）

はじめに

「あそびの森」とは東海学院大学短期大学部幼児教育専攻と東海学院大学人間関係学部子ども発達学科が主催する「子育て支援活動」です。理念は「子育て・親育ち・学生の心の育成」であり、保育者養成校が持つ専門的知識と、人材、場所（保育実習室）を開放し、地域との共生を図る活動の事です。理念である「子育て・親育ち・学生の心の育成」とは親と子が「あそびの森」という場において遊びを共有する事により、親は子どものこころ（気持ち）を理解する。子どもは親と遊びながら温かさや、優しさを感じ、人や物と触れ合って遊ぶ楽しさを知り、心を豊に耕していく。また、学生は様々な親と子の繋がりを間近に体験する事で心の育成を図る事にあります。※1

2002年度入学生から実施された保育士養成課程カリキュラムの大綱化科目の設定にあたって、本学では、保育の今日的な課題と現在の学生気質・資質の両面から捉え、柔軟性と幅広い人間性を兼ね備えた人材育成を目的とし、コミュニケーション能力と自己表現力ならびに自己学習能力を培う科目として「保育ゼミナールⅠ・Ⅱ」（※2）を位置付けた。そして、この授業を核とした実践の場として、また「地域社会との共生」の視点に立った、本学園の「今日の教育ニーズに対応した教育改革プログラム」の実施プログラムの一つとして、全学的支援のもと2004年度より子育て支援センター「あそびの森」を開設した。

その子育て支援活動「あそびの森」は、2013年度で10年が経過した。利用者はのべ2万人

を超え地域社会に大きく受け入れられている。またこの活動は保育者養成の中核科目として根付き、学生には実践的に学べる教科目として高い期待と人気がある授業となっている。

年間10回以上開催される「あそびの森」活動に学生が在学中に関わるのはひとりあたり3回以上あるが（※3）、関わる学生は毎年変わっていく。しかし先輩から後輩へ理念と活動がしっかり受け継がれており、確実に地域に根ざしている。（※4）

本稿では、子育て支援活動「あそびの森」の10年間の活動を振り返り、学生がこの活動を通して育ったと思われる保育の力量について、音楽表現活動支援の視点から検証していきたい。

Ⅰ 実践プログラム

毎年の「あそびの森」プログラム実施にあたっては各ゼミ（※5）が1～2回担当するとしている。

実践に当たって各ゼミ共通のコンセプトは「親子で様々な遊びを体験する機会と場を提供すること」と、「子どもの主体性や考える力を養うを達成するプログラム構成とする」であった。

「子どもの生活と音楽—子どもと音楽表現遊び—」のテーマを選択した篠田ゼミでは、

- （あ） 生活の中から面白い音を発見し楽しむ
- （い） リトミックを使った遊びを体験する
- （う） 音楽を使った劇ごっこを体験する
- （え） 「こどもおんがくかいごっこ」で本物の楽器の音色を楽しむ

等を中心としたプログラムを提供してきた。

篠田ゼミの基本的なプログラムは次の通りである。

- (1) ごあいさつ
- (2) 手遊び
- (3) 体操と歌
- (4) 本日のテーマの遊び
- (5) 絵本
- (6) さようなら

プログラム作成の留意点としては次のようである。

- (1) 「あいさつ」は学生と子どもだけでなく、隣周りのお友達ともあいさつをする遊びを提供する。(これだけで周りの子どもや保護者に笑顔が出てくる)
- (2) 「手遊び」は学生対子どもで、出来るだけ問いかけのあるものを選ぶ。
- (3) 「体操」は親子がギュッと抱き合えるまたは親子がスキンシップを取れる振り付けを入れる。「歌」は季節を感じる事ができる童謡を中心に選び、聴かせる曲と子どもと一緒に歌う曲を入れる。
- (4) 「その日のテーマの遊び」その日のテーマが身体を使うものであるか、あまり使わないものかによって、前後のプログラムの内容を考える。
- (5) 「絵本」は元気に遊んだテンションを静め、お話の世界に浸る。内容によっては読み方を工夫する。
- (6) 「さようなら」は今日の遊びを振り返り家庭での遊びに繋げるよう、内容を考慮した言葉がけをする。また、次会への期待を高めるためにハイタッチやトンネルを作って送り出す。

毎回これらを留意してプログラムを作成してきた。特に留意したことは「子どもの心を開放する」プログラムをつくることであった。毎回の遊びのプログラム内容と考察については東海女子短期大学紀要第 32 号～34 号、及び東海学院大学短期大学部紀要 35 号～40 号に報告文を掲載しているのでここではふれない。

Ⅱ 検証と考察

1. 対象と検証方法

対象は篠田ゼミ生 (各学年 11 ～ 15 人程度)

方法は、平成 24 年度実施担当学年の記録 (ゼミノート) と平成 22 度から 25 年度実施分のあそびの森プログラム実施当日の振り返りレポートの分析とした。

2. 検証事項

篠田ゼミの毎回のあそびの森のプログラムの内、其々の回の当日のテーマとなっているプログラムを中心に検証する。

まず、音楽表現の分野から「あそびの森のプログラム」を体験した学生が音楽表現活動を支える技能面から A「①聴く活動②歌う活動③観る活動④演じる活動をどの様に捉え実践したか」について考察と検証をし、次に、音楽表現活動分野における保育者の役割としての力量のうち B「①子どもの感動発見に共感し活動を支える ②憧れのモデルとなる (遊びのリーダーになる) ③チームの一員として動く」の 3 点について検証と考察をする。

3. 検証と考察 A

ー音楽表現の技能面からー

おおよそのプログラム内容を分類すると以下の通りである。

- ①子どもが聴くプログラム・合唱・マリンバ・サックス、フルート、クラリネットなどの管楽器アンサンブル演奏
- ②子どもが観るプログラム・ペープサート劇・パネルシアター・絵本
- ③学生と子どもの両方が歌うプログラム・童謡をうたう・手遊び・わらべうたを唄う
- ④学生と子どもの両者が演じるプログラム・体操・わらべうた遊び・手遊び・絵本読み・司会進行

ここでは上記の①～④について其々検証・考察をする

①聴く活動

(子どもが聴くプログラム・合唱・マリンバ・サックス、フルート、クラリネットなど)

プログラムを企画するにあたって、学生が特技とする楽器の演奏力を披露する内容を取り入れている。楽器の演奏はだれにでも出来るもの

ではないので、特技として自信を持って欲しいと願う。難しい曲を披露するのではなく、子ども達に「本物の楽器の持つ美しい音色や迫力ある響きを聴く体験を提供する」を目的とし、子どもにとって「本物の楽器の音色を聴くチャンスは子どもの豊かな感性を育てる一助になる」ことを学生自身にも体験して欲しいと願うからである。

学生の多くが特技としている管楽器は音色が豊かで美しく響き、楽器の形も面白い。また、単旋律楽器であるため童謡を演奏することは容易い。其々の楽器の音域の内、学生が一番出しやすい音域で創られている曲を選び、自信を持って演奏できる曲を演奏した。とにかく、演じる学生が不安無く楽しんで演奏出来る環境を設定した。また、複数の楽器とアンサンブルにして演じる側も安心でき、聴く側も楽しむことが出来るよう演奏形態を工夫した。普段見たこともない面白い形をした楽器から自分の知っている童謡やアニメソングが聴こえて来る。間近で聴けるこれらの体験は子どもにとっても保護者にとっても楽しい時間となった。好評だったプログラムは「こぎつね」など、動物の出てくる童謡を楽器を変え、曲も少しアレンジしてストーリーを付け、語りと共に演奏するタイプの内容であった。学生は練習から本番まで、生き生きと主体的に意欲を持って取り組むことが出来た。さらに、楽器を演奏しない学生は皆で知恵を絞り、語りで参加したり、補助のペープサートなど視覚で楽しむ演出を考え、担当することができた。学生、皆が主役になれるプログラム内容であった。マリンバアンサンブルや他の楽器とのアンサンブルに於いても他の人の音をよく聞き合い、アンサンブルの美しさを味わう活動を心から楽しみ、意欲を持って練習に励む姿がみられた。

合唱はコーラス部の学生にも出演を依頼したので聴き応えのある三部合唱となった。男子学生の低音の響きは童謡の旋律に重厚感を作り出し、身近にハモリ（響き合い）を感じることができ、歌っている学生も聴いている子どもや保護者も重厚な響きの世界に浸ることが出来た。音楽の素晴らしさを感じる貴重な体験を提供できた。

これらの体験は学生のチームワーク力を高め

るとともに、表現技術の技能向上への意欲を十分に沸き立たせたと感じた。100分間のほとんどを自分たちの演奏で進めなければならないプログラム「おんがくかいごっこ」に挑戦した学生の達成感は練習の辛さに耐えた学生だけが味わえる大きな大きな喜びを味わった。

②観る活動

（子どもが観るプログラム・・・ペープサート劇・パネルシアター・絵本・等）

この活動も観る側の子ども達にとって「観る活動」となり、見せる側の学生にとっては見せる活動つまり、「演じる活動」となる。

ここでは学生の演じる活動に視点をあてていく。

「ペープサート劇」は学生が10人前後のグループを作り、其々のグループごとに15分程度の作品を製作し、子どもの前で上演するものとしている。作品は「2～5歳児を対象としたお話の内容にすること」「躰けに関する内容ではなく、絵本にあるような、夢のあるストーリーにすること」とした。そして、短期大学部ではペープサート劇製作と大学祭での上演（わんぱくコーナーという子ども向けの遊びコーナーに来てくれた親子を対象とした公演）は必修課題としているので全員が体験する。（※6）他に、必修ではないがパネルシアターは、かなりの学生が一作品以上製作し学生同士で上演し合っている。だからこそ、学生は製作した作品を子ども達に観てもらおう機会を望んでいるのである。この演じる活動は「自身をさらけ出す」というほとんどの学生にとって苦手な課題がある。初めは抵抗があるが、まず、ペープサート劇を体験する。自分の顔を舞台に隠し、紙人形を通して演じる体験をする。次にパネルシアターで自分の姿も現して演じる体験をする。等等と、段階的に取り組んでいく。そのうちに少しずつ慣れて、自信が付いてくる。ペープサート劇の紙人形を通して役になりきる体験は、自身を客観的に見ることが出来、役柄を借りることによって自分を出す体験が出来る。この成功体験を積み重ね徐々に人前で表現できる自信がついてくるのである。また「他者を演じる体験がまわり

の様々なタイプの仲間を理解し受け入れるところをも育てる素材となる」と、この活動の学生の成長を間近で見て強く感じた。

一方、子どもにとって、テレビや絵本には無い紙人形の劇はリアリティーが少ないので物足りないと思われがちだが、子どもは十分ファンタジー（お話の世界）に浸ることが出来る。紙人形は笑顔と困った顔、あるいは泣いた顔等、表と裏が異なる二つの表情しかないが、演じ手の様々な表情を付けた台詞を言う学生の声色と動きで紙人形に息を吹き込み、十分生き返らせている。子どもにとって、紙人形が人の声で受け答える体験も貴重であるといえよう。

③歌う活動

－学生と子どもの両方が歌うプログラム・童謡をうたう・手遊び・わらべうたを唄う－

幼児がこころを開放し、安定した情緒で、はずんだ気持ちの時、口から歌がこぼれる。そして、歌うという活動は子どもも大人も気持ちが開放され、ウキウキ楽しくなる。さらにみんなで一緒に歌う時は一緒に歌っている仲間となんともいえぬ一体感が生まれる。音楽をする中でこの「歌う」という活動は実に私たちの心に深く結び付き、自分自身の心とも深く結びつく。さらに、折々の感情をコントロールしてくれたり、大きな不思議な感動を生み出す感性を揺さぶる力も備えている。思えば、ほとんどの人はこの歌うという活動によって自身の感情を操り、維持している。どんな幼子でも声を出し抑揚をつけて歌うことは人間の最も初歩的な気持ちを表す行為であろう。

あそびの森のプログラムには、毎回、幼児が耳にする事の多い童謡やアニメ曲を会場の皆と一緒に歌うプログラムを入れてきた。学生は歌詞を模造紙に書いたり、フレーズごとに言ったりしながら一緒に歌っている。会場が一体となる瞬間である。歌う活動は他のプログラムと違って、一体感を十分に味わえる活動であり、集団でしか味わえない活動でもある。もう一つは、全体参加でも部分参加でも自分の参加したい部分だけを選び歌うことが出来る活動でもあり、これは大きな特徴と言える。学生はこの活

動の醍醐味を知り、体験したことにより、歌う楽しさや心地よさ、皆で歌う一体感を子どもと共に味わいたいと願う。そして、この活動への意欲が高まり、学生自身も歌うことへの楽しみが育っていく。この育ちが声の「質」や「声量」に繋がる大きな、大きな力と意欲になっている。

④学生と子どもの両者が演じる活動

－体操・わらべうた遊び・手遊び・絵本読み・司会進行等－

手遊びや体操のような子どもも学生も一体となって動く（演じる）活動では、学生は子どもによくわかるように、大きな動作で表したり、鏡となる動きを表す必要がある。さらに、次の動作を言葉で伝えたりのような1拍前の動きをしていく技術が必要となる。もう一つ大切なことは、常に全体に向かって語りかけながら動きを伴う技術も必要となるという点である。自分も踊りながら子どもの動きを褒め、次の動きを言葉で伝えるというリトミックのカノン遊びのような力が求められる。言葉がけも、全体にかけたり、特定の子どもにかけたりと、全体を見渡す力と、楽しく盛り上げる会話力とが必要とされる。この力量は先輩の姿や実習園の先生を観て学び、自身も少しずつ何度か体験することで養われる部分と考える。つまり、自分で体験してみないと育たない。どの学生もこの活動を部分的だけでなく、全体を一度は体験することにより、保育者としての力量を高めていく。そのため、ゼミではどの役も皆に回るように計画をし、チャンスを共有できるように心がけている。

絵本読みについては、学生が一番自信が持てる活動である。ストーリーが作られており、内容を理解し、登場人物の気持ちになって読んでいく技能は学生にとって解り易く、授業の中で何度も実践しているからである。「あそびの森」のような60～100人以上が集まる大きな会場では、複数の学生で登場人物になりきって読み合ったり、当日の参加幼児の年齢を見て、絵を指差したり、補助のペーパーサートを作ったりと工夫できる力量が育っている。そして、これらの工夫はすべて学生が話し合う中から生まれている事がうれしい。

4. 検証と考察B

－保育者の役割としての力量－

次に、学生の記録の中から保育者に必要な子どもへの配慮に対する「心の育ち」と音楽表現を支える保育者の役割に関する力量の育ちについて検証、考察をする。

1) 子どもの気持ちに寄り添おうとする優しさ
※以下、四角の枠内は学生の記録したもの、原文のまま。()内は筆者が加筆した

a：4歳の女の子と遊びました。初めは見ていただけでした。でも私の手をずーっと握っていました。(私は)「まだみんなの中に入りたくないのかな?」と思ったので、ずーっと手をつないでいました。「なべなべ」の遊びの時、少し握っている手がゆるんだので「Aちゃんも行く?(遊びに参加しますか?)と声がけをしたら、「うん」といって(言い) やること(皆と一緒に遊ぶ事)が出来ました。

b：Bちゃんという2歳の子と遊びました。手遊びのために仕掛けてあった動物をずっと見てたので「あれ触ってみようか?」と声がけした。手を挙げたので「おねえさんだっこしてもいい?」と聞くと抱かれてきてくれたので抱っこして高いところの動物を触った。つぎつぎと指差しするので抱っこしたまま端から端まで走ることになってしまった。大変だったけどその後もずっと私のそばにきてくれていた。可愛かった。はじめはどう接したらいいのか不安だったけどBちゃんと遊べて楽しい会でした。

c：挨拶をして、さあどうしよう? と、回りを見ると先輩はもう子どもの中に入って遊び始めていました。あわてて私はお母さんのそばにべったり座っている子(3歳くらい)にボールをころがしてみました。にこっと笑ってくれたので、ボールを送り続けてみました。(プログラムが進んで)手遊びからぐるぐるドカーン(体操)をおどるころには私がそばに行っても一緒に(体操を)してくれるようになりました。先輩はすっかりペア(子どもと学生)でなかよしになっていました。さすがだなと思いました。

どの事例も学生の「一人ひとりによりそって」の気持ちが現れており、一年間でここまで成長できたことをとてもうれしく感じる。

aの事例の学生は、一見、子どもとずっと手を繋いで見ているだけのようにも感じられるが、子どもの手の握り具合を細かく捉えている。初めて出会った子どもの気持ちを瞬時にここまで捉えられる気持ちに感動する。

bの事例もお母さんにべったりくっついていた子が数分で学生と仲良くなり学生が司会をしている時も傍にいてほど仲良しになった。この時の学生は子どもが壁に張ってある動物に興味を示したことを見逃さずに捕らえ、一つ一つの動物の歌を子どもに歌って聞かせていた。とてもほほえましく、学生が子どもを前にした時、普段は見せない優しいお姉さんに変貌する姿は、実践だからこそ垣間見られた対応事例である。実践の大切さを痛感した。

cの事例は、一年生で始めてこの活動に参加した学生である。不安いっぱいに参加したが、先輩の生き生きと子どもとかかわっている姿を間近に接し、自分も何か出来ないかと考え、すぐに側にあったボールでコンタクトを取る行動に出た例である。先輩の姿に励まされ、自分はどうのように動けばいいのかを真剣に考え、実行した。これも実践ならではの事例である。このような体験が大きな自信となり実習に繋がったと思う。憧れの先輩の行動を見て、また自分も憧れられる先輩になっていきたいと努力する。この姿は、先輩から後輩へ「確実に受け継がれていく」ことを確信した。

2) 責任感

a：滑り台の係りだった。階段の途中で止まってしまう子と下から上ってくる子がいた。○○さん(滑り台係りのもう一人の学生)と「ぶつかると痛いからお姉さんが「いいよ!」というまで待っててね?」と言ったらちゃんと待ってくれた。ひとりもぶつからなくて良かった。

b：去年は先輩のやっている事を見てるだけでした。遊びも先輩が考えてくれたのでそれをいわれたとおりにやるだけでした。今回は「こ

の遊びでなにを楽しんでくれるのかな?」とか、「どんな順番がいいのか」とか、「危険なところはどこかな?」とかをしっかりと考えました。みんなとよく話せるようになりました。(意見交換が出来るようになった)

c: 「ばしやばしやいけ」の材料が集めにくかった。(集められなかった) 薄いのでないと鳴らない(音が出ない) から困った。でも友達が協力してくれた。・・・(略)

d: かえるくんのコップが足らなくなったとき、先輩は机の周りにいる子達に「いまからコップを作りますお手手はおひざに置いて見てくれますか? 出来る人?」と真剣に話していた。ちょっとこわいくらいだったけどコップにキリで穴を開けたので安全を伝えるためだったと思った。やっぱ先輩はすごい!!

あそびの森活動やフィールドワークや実践活動のような子どものいる現場での授業には遅刻や欠席が無い。当たり前ともいえるがこれは学生の気持ちの現われと感じている。自分たちが主となって行う活動を大切に思い、責任を持って子ども達に楽しさを遊びを届けたいという気持ちが行動と結びいたと思う。どの学生も企画の段階から「いやだ!」とか「できない!」といった弱音は吐かない。常に「どうしたら子どもが楽しく活動できるか?」「どうしたら親子のスキンシップが図れるか?」「危険は無いのか?」「子どもが集中できるプログラムと時間配分は?」・・・等等、一生懸命考える。

dの事例のように思いの他、盛況で材料が足らなくなった時も子どもの安全を第一にという配慮が来ている。事例aでも滑り台の安全をしっかりと配慮している。学生が主体的に行う事は学生自身の責任感を大きく育てるといえる。

3) 自己表現力

a: 午前(の部)では緊張してうまく進められなかったけど午後(の部)では自分に気合を入れました。そしたら子ども達が元気になったのでびっくりしました。やっぱ自分を出さないと前に進めないと思いました。

b: あそびの森でやった「棒が一本」(の手遊び)は実習でやりました(やったことがありました)。大体わかっていただけ幼稚園より年齢がばらばらだったのでやりにくかったです。でもゆっくりわかりやすくやることができました。

c: パネルシアターの時、前の動物役の人がアドリブを出してきた。(私も) 勇気を出してアドリブを入れたら子ども達が反応してくれたので「やったー」とうれしかった。

人前で何かをすることは「自分をさらけ出す」こととなる。普段の授業の場では本気で演技をしたり発表したりはしない。手遊びでも、絵本読みでも、演じるパネルシアターでも、顔を出さないペープサート劇でも60%~70%くらいまでしか出さない。それは相手が大人であり、仲間だからである。しかし、「あそびの森」などの実践活動で子どもの前に立つと別人かと思うような表現力を発揮できる。aさんのように、子どもの前で心から楽しんで演じている姿とbさんのように子どもに精一杯楽しんで欲しいと工夫する姿や、cさんのように臨機応変に対応する姿を観ることが出来る。あそびの森活動での実践の場では、こんな素敵な姿を確認することが出来るので、安心して現場に送り出せる。

4) 主体的な行動(憧れのモデルになる)

マリンバアンサンブルは幼児にも保護者にもとても人気が高いプログラムである。しかし、そのためには少なくとも2台以上のマリンバを解体し(1台を9パーツに分解する)エレベーターの無い棟の3階から敷地内の反対側の端にある棟の5階まで運搬しなければならない。暑い季節は重労働である。しかし、学生は「子どもが喜んでくれることは取り入れたい」「好きなことはやりたい」とプログラムから外さない。また、あそびの森活動を一回体験した学生はその後の「大学祭」や「学外活動」「出張あそびのもり」では、企画の段階から活発な意見とともに加わり「〇〇だからわたしはこれをやります」とか「〇〇をやります。誰か手伝ってくる人?」などと主体的に活発に意見が出され、学生主体のゼミグループに見事変わっていく。

5) チームワーク力

a：係りを決めるとき、一年生は「どうしよう?」と周りの子を見てたけど、先輩はささっと決めて、「ここの好きなところ」に名前を書いてっ!」とちゃんと1、2年がペアになるようにしてくれた。・略～〇〇を分けるとき先輩が「王様じゃんけんしよっ!」と言った。いつもおもしろいネタをもっている先輩はすごい!

b：クリスマス会も発表会も先輩達はあっという間に役割(担当)を決めてしまいます。本当に仲がいいんだな!!と思いました。

c：手品でねたがばれ無いうように司会者が前に立ってくれた。さりげなくカバーしてくれた〇〇さん有難う!

d：絵本が電気の光に反射していることに気付いた〇〇さんが後から支えくれました。読んでいる私は気づかなかったのでびっくりしたけど後で聞いてカバーしてくれたことに感謝しました。

e：パネルシアターで先輩が「Aパターンでいこっ」「OK」と言ってアドリブで今日の遊びの問いかけをしていました。リハーサルではやらなかったのにすごいと思いました。

F：プログラムを作るとき、やっぱりみんなのレポーターはすごいな!!と思いました。私だけだったら出来ないけどみんなといっしょだったら出来るのがどんどん増えます～略

保育の現場ではチームで保育をしている。たとえクラスがあり、担任がいても、子ども達は園庭の好みの場所で遊び、送迎の園バス内や時間外保育などクラスを超えて過ごす時間が多々ある。保育の現場では、常に全体の職員で情報を共有し保育者がチームの一員として関わっていかねばならない。どんな場所でもきちんと自分を表現でき、相手の気持ちを受け入れるという人間関係の構築が大切である。

ゼミの授業では各学年、4つのクラスから集まっている。授業は週一コマなので週に一度しか集まれないが、早い時期にうまく団結し、お互いを認め合い、其々の得意なところを出し合い、認め合い、心許せる仲間の集まりになるこ

とを心がけ表現遊びなどを多く取り入れ指導している。そして、あそびの森や地域への出張あそびの森や、大学祭などを進めていくたびに団結力が、仲間意識が育ち、どんどんチームワーク力が育っていく。そして、fさんのように「私だけだったら出来ないが、みんなと一緒にだとレポーターがひろがる・・・」と素直に他者を認め、チーム力を認めるまでに成長する。また、aさん、bさん、eさんのようにお互いが信頼し合い、後輩をも気遣いながらリードすることができるようになれる。これらは一例に過ぎないが、学生は「自分達に一つの活動を任された」「外部から依頼が来た」学内でも、実際に「子ども達が来てくれる」という現場に立つと、とたんに主体的に行動する姿に変貌する。やはり、子どもの前では精一杯応えてあげたいと保育者魂を具えた良いお姉さんになれるのである。「あそびの森」活動は、皆が其々の得意なところを出し合い、チームメイトとなり団結していく。素晴らしい体験の場となっている。

まとめ

10年間「あそびの森」活動を実践してきた。そして、この活動を体験した学生の成長する姿に接してきた。その中で、深く感じた事はただ一つ、「あそびの森活動は学生の心も技能も保育力も大きく育てる活動だ」ということであった。上記の幾つかの事例からも感じ取れるように「実践に勝るものはない」と、つくづく感じている。

1年生後期、2年生前期と一年間のゼミナール授業の後、2年生後期に「教職実践演習」の授業がある。その中でロールプレイングを行う内容があるが、学生は実習や「あそびの森」活動での実践体験が豊富にあるので、様々な事例が出され、それに対してのディスカッションも活発になされる。また、保育者としての大切な子どもへの配慮すべき項目が続々と出てくる。保育者への学びは座学だけではイメージすることが難しい。だからこそ、実習で一对一(クラス一名の実習生)で指導を受ける実習体験もあるが、やはり「あそびの森」活動のような、

同じテーマで実践をすることにより、其々のテーマを具体的に考察し、それぞれの思いを存分に出し合うディスカッションが生まれる場が必要であると痛感する。

そして、これらの実践を体験することにより、学生自らが主体的にそれらの活動に必要な技能をも、学びたい、製作したいと意欲が湧いてくる。今後、もう少し育てたい点は、環境の設定である。「あそびの森」等、子育て支援に関する活動は年齢の事もあって、室内に限定されている。広い園庭、公園など戸外へも広げ、その場合の環境設定なども体験出来ると良いと考える。

これらの実践事例より「あそびの森」活動はコンセプトに掲げた学生の育ちを叶える場所であったと確信した。

※1 あそびの森の概要およびコンセプトは2004年当時の幼児教育専攻長（若杉雅夫教授）が発案し作成した。そしてそのコンセプトを幼児教育専攻教員全員が共有し、実践してきた。

※2 保育者養成カリキュラムの改訂のたびに授業名の変更はあった。平成25年度は保育ゼミナールであった。

※3 学生があそびの森に関わる授業は「出張あそびの森」や「保育内容研究Ⅰ・Ⅱ」などの選択授業があり、学生の選択有無によって参加回数が異なる

※4 地域に根ざした根拠としては・「あそびの森の試み」東海女子短期大学紀要第32号-若杉雅夫・篠田美里・長谷部和子・杉山喜美恵・瀬地山葉矢共著や・全国保育士養成協議会研究誌「地域社会とともに育てる保育者養成」若杉雅夫・篠田美里共著に掲載

※5 あそびの森に参加するゼミ数は年度によって異なるが6～10ゼミが年に1～2回受け持つ。さらに、出張あそびの森などを受け持った場合は担当回数が増える。

※6 本学ではペープサート劇の製作と学生対象の発表試験及び大学祭での発表、(あそびコーナーを観に来てくれた親子(どの時間帯も60人～120人参加)の前で発表すること)を全員の課題としている。その他に選択学生による近隣の幼稚園、保育園等へ出張公演や児童館やあそびの森での発表がある。平成25年度は7つの幼稚園保育園と2つの児童館に出張公演し、あそびの森でも上演した。